

「感謝経済」をめぐる“風景”12（最終回）

～“感謝が廃ればこの世は闇だ”～

“気持ちの動物”である人間、経済合理性と義理をも乗り越えていくアウフヘーベン（止揚）の模索、「感謝」

やると思えばどこまでやるさ

それが男の魂じゃないか

義理がすたればこの世は闇だ

なまじとめるな夜の雨

（村田英雄歌唱 歌詞:佐藤惣之助 作曲:古賀政男

「人生劇場」より）

これまで今回を含め 12 回にわたって「感謝経済をめぐる風景」と題してコラムを発売してきましたが、オウケイウェイヴ総研所長としてのこのテーマのコラムは今回で終わりになります。お読みいただき感謝です（2020 年からは“所長のコラム”として随時掲載をさせていただきます）。

人々が紡ぎ出してきた様々な表現・言葉には、人間社会の実相や本質を切り取る“神髄”や“真理”がにじみ出ているものです。

これまでコラムで取り上げたのは、経済学の祖＝アダムスミス、2009 年ノーベル経済学賞受賞のオストロム教授、ドイツの社会学者テンニース、夏目漱石、トランプ大統領、トニー・ブレア元英国首相、マーガレット・サッチャー元英国首相、日本の時代劇に登場する“悪徳商人”「越後屋」と“お代官様”、ジャズミュージシャンの故エリック・ドルフィー、などの言葉やせりふでした。（分野も様々で脈絡なく、それは決して知識の広さを示したものではなく、浅薄な私の琴線に触れたもので、引用や紹介をさせていただきました）

還暦近い年齢の人間として、21 世紀の今の人たちから見ると“20 世紀っぽい”かもしれないが、「感謝経済をめぐる風景」の最終回は、昭和を代表する演歌歌手、村田英雄さんが歌った「人生劇場」の一部を冒頭に示しました。

「義理が廃ればこの世は闇だ」

義理人情の世界にがんじがらめにされては生きたくない、自由に自分の好きな価値観で生きていきたい、と思われる方も多いかと思います。

義理とは、なんなのでしょう？

- 「1、物事の正しい筋道。また、人として守るべき正しい道。道理。すじ。「義理を通す」「義理にはずれた行為」
- 2、社会生活を営む上で、立場上、また道義として、他人に対して務めたり報いたりしなければならないこと。道義。「義理が悪い」「君に礼を言われる義理はない」「義理をわきまえる」
- 3、つきあい上しかたなしにする行為。「義理で参加する」
- 4、血族でない者が結ぶ血族と同じ関係。血のつながらない親族関係。」
- (デジタル大辞泉(小学館)より)

義理人情にからめとられて自由がない、というニュアンスだと、上記辞書では、主に3、また一部は2の意味になりますが、私たちは意外と「義理」が「物事の正しい筋道。また、人として守るべき正しい道」という使い方はしていないかもしれません。

では、「感謝」という言葉はどうでしょうか？

これまで、アダムスミスの「感情道徳論」からの引用で、「必要な援助が、愛情から、感謝から、そして友情と尊敬から、相互に提供される場合は、その社会は繁栄し、そして幸福である」と紹介しました。

「感謝：ありがたいと思う気持ちを表すこと。また、その気持ち。」

(デジタル大辞泉(小学館)より)

いくつかの辞書の解説、説明でも「感謝」はとてもシンプルな説明になっています。

言語・文化学の専門家ではないので、考察が適切かどうかはわかりませんが、複雑な社会の人間模様や人間の生み出す複雑な関係性から生み出されて、やや多面的な使われ方がなされる「義理」に比べ、「感謝」の意味や概念はとてもシンプルです。

私は、「感謝」が、人間が原始、古代から社会生活を営んできたあらゆる場面で根源的な真理、決定的な“不易流行”の最たるものである、というのは論を待たないと思います。

まだ言語や概念が複雑になる前、原始人が何らかの要因(それは仲間の原始人の行為かもしれないし、たまたま吹いた“神風”のような突風かもしれませんが)で、自分の生命の危機から逃れることができた場面があった場合、その原始人の心の中には他人や自然に対する「感謝」が自然発生的に浮き出ていたことは間違いないのでは、と想像もし、そう思うことを禁じ得ないのです。

ありがたさを感じて、自然に目が潤む、涙がでる、ということは、道学者よろしく指摘するわけではないですが、その瞬間が感謝の神髄であり、そこには他意も計算もまったく入り込む余地はないでしょう。

人間は、感謝や感謝の気持ちを持つ一方で、生存競争の環境の中、殺戮や、私有財産という枠組みのもと国家という複雑な概念と構造を有史以来の長時間をかけてシステム化して構築し、その果てに今の資本主義や資本主義のシステムの根幹をなす通貨システムを生み出しました。

その間、“感謝”という美名を悪用したり、尊い気持ちを騙って、詐欺や人を陥れるような、資本主義という構造の人間の欲と絡んだ負の側面から由来させ、貨幣経済ベースならではの様々な犯罪も生じさせてしまっています。特に資本主義、金融資本主義の成れの果てというべき状況も生まれかねない 21 世紀の現在、SDGs のような概念が重要とされるトレンドが明確になってきていることは、SDGs の個別具体的な項目もさることながら、その前提に、地球とそこで生存する人類（環境も含めれば生物すべても含む）への、“こうして生きていけることへの感謝”があることも間違いのないことです。

経済の分野では、経済学発祥直後からのレッセフェール（自由放任）や新自由主義の市場中心主義、マネタリストから派生した面もある貨幣に主軸を置く、いわば“経済学学”のようになった経済学説、などが注目を浴びることが特に近代から現代では多かったです。現在は、一度“人間の本質”から遊離、解離しつつある方向に向かっていった経済学はこれでいいのか、と、経済学、経済システムのあり方も見直され始めています。

自分の（儲けや楽の）ため、か、世のため人のため（地球と世界人類の将来、将来世代のため）か、試行錯誤と模索をへて何巡も歴史の時間をかけてグルグルと回ってきて人類がたどり着いた最後の最も大事な真理は、やはり、何ものにも代え難い「感謝」というものであることに、今一度人類が思いを致す時期が来たとも言えるのではないのでしょうか。

私たちオウケイウェイヴが取り組んでいる「感謝経済」の考え方も、こうした人類の模索の一端のさらに一部に過ぎないものですが、人間の本質や心理である、感謝という尊い気持ちや行為、そこから卑しくいやらしい他意や計算や“ずる”を取り除いて、感謝や感謝の気持ちを公明正大にエコシステムにつなげていけるか、その“新機軸”の産みの苦しみの痛みも合わせ、さらに模索と努力を続けて行くことになります。

「義理（物事の正しい筋道。また、人として守るべき正しい道。道理。すじ。）が廃ればこの世は闇だ」

感謝が廃れても確実にこの世は闇になります。

【株式会社オウケイウェイヴ ミッション (企業理念/目的)】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する



株式会社オウケイウェイヴは2018年4月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発。2019年末までに、この事業にすでに100社を超える企業や団体が参画し、新たな概念の事業に注目していただいている中、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、『「感謝経済」をめぐる“風景”』と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示した。



大山 泰 オウケイウェイヴ総研 所長

1961年東京生まれ。一橋大学経済学部卒。株式会社フジテレビジョンで経済部長、経済担当解説委員、等を歴任。BSフジ「プライムニュース」など報道番組で経済解説を行う。内閣府/公正取引委員会「競争政策と公的再生支援の在り方に関する研究会」、農水省「政策評価第三者委員会」「食料・農業・農村政策審議会」など、複数の政府の有識者会議等の委員を歴任。